

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Consciousness of common language use in Hokkaido : A report on the sociolinguistic survey in Furano and Sapporo

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 相澤, 正夫, AIZAWA, Masao メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001331

北海道における共通語使用意識

—富良野・札幌言語調査から—

相澤 正夫

AIZAWA Masao : Consciousness of Common Language Use in Hokkaido :
A Report on the Sociolinguistic Survey in Furano and Sapporo

要旨：方言と地域共通語とでは、捉え方の方向性、観点が基本的に反対である。方言が、地域差すなわち変異の観点からみた各地の日本語であり、区画論的に言えば、ある言語的基準に関する差異性をもとに、広い地域から狭い地域へと日本語を地域区分した結果であるのに対して、地域共通語は、個人や地域ごとに多様な日本語を何らかの均一性の観点から見直し、その通用範囲の広がりによって統合していく過程の中に認知されるものである。本稿では、北海道の富良野・札幌における社会言語学的調査の資料にもとづき、主として後者のようなことばの共通性の視点から、両地点における都市化の程度差に注目しつつ、いわゆる北海道共通語の使用状況と、その背後にある話者の言語使用意識との関係について分析・報告する。

キーワード：全国共通語、北海道共通語、言語使用意識、質問法、都市化

Abstract : The conceptual difference between “dialect” and “common language” is that the former is in principle concerned with the diversity of language, and the latter with its uniformity. The objective of this paper is to report, from the latter point of view, the interrelationship between the actual use of the regional common language in Hokkaido and the users’ consciousness of language use. The data was obtained from the sociolinguistic survey conducted in Furano (a rural community) and Sapporo (a large city). A contrastive analysis between the two communities is also attempted with respect to the degree of “urbanization” of those communities.

Key words : nationwide common Japanese, regional common language in Hokkaido, consciousness of language use, questionnaire, urbanization

1. はじめに

一般に、方言あるいは地域語といえば、地域差すなわち変異という観点からみた全国各地の日本語のことである。各地の日本語を、このような観点から方言として位置づけるには、地域区分に有効な何らかの言語的基準を設けて、上位の大区分から始め、さらに細分化の必要に応じて、より下位の中区分・小区分へと降りていく方法が一つある。これが、いわゆる伝統的な方言区画論による現代日本語の地域的分類である^{注1)}。

方言区画によって、ある特定地域の日本語は、日本語全体の鳥瞰的な視野の中に位置づけられる。また、方言としての位置づけを求めて、上位区分から下位区分へと降りていく過程は、そのまま日本語の歴史的な分派・分岐の経路を過去から現代へとたどることにもなる。

ここで話題にしようとする北海道の日本語も、日本語の一方言として、たとえば、本土方言>東部方言>北海道・東北方言>北海道方言のような、広から狭へと向かう方言的な限定過程の一段階とみることができる。この北海道方言も、それ自身が「海岸方言」と「内陸方言」とに分岐している。さらに海岸方言の方は、渡島半島部の「道南方言」と、北海道全体を海岸線沿いに一周する「狭義の海岸方言」とに細分される。このような北海道内での方言差の形成が、本土から人々が移住し、定着していった歴史と深い関係にあることはいうまでもない。

最も古い歴史をもつ道南方言は、北奥羽方面から海産物を求めて渡った人々によってしだいに形成され、江戸時代に入って松前藩が置かれたことでさらに独自の方言的成長をとげたものである。この道南方言の流れをくむ狭義の海岸方言は、渡島半島部から魚貝類を求めて海岸沿いに移動・定住していった漁民たちが、沿岸部各地に形成していったものである。このように海岸方言は、その成立事情からして北奥羽方言的な色彩を色濃く残している点に特徴がある。

一方、内陸方言は、明治時代に入って札幌に開拓使庁が置かれ、内陸部の原野が急速に開拓されることになってからの百年余りの間に、全国各地から

の入植者が持ち込んだ諸方言が混淆して、一種の共通語のようなことばとして形成されたものである。その方言としての歴史は、海岸方言に比べてまだまだかなり浅いといつてよい。

この報告が対象とする二つの地域についてみると、富良野市は、北海道中央部の、いわばそのへソにあたる辺りの小都市であり、札幌市は、やや海岸寄りではあるが、石狩平野の西南部、豊平川の扇状地上に発達した大都市である。これら二地域で話されることばは、方言区画的に言えば、北海道方言の下位区分である内陸方言の中の二変種ということになる。

ところで、本稿の目的は、富良野市と札幌市で話されている日本語に対して、厳密な方言的位置づけを与えることではないので、この件については、これ以上立ち入らないことにしよう。ここでは、むしろ上で述べた方言区画という捉え方とは反対の方向性をもった視点から、二つの地域の日本語を眺めてみたいと思うからである。

方言区画的な原理に従えば、日本語は、まず、西の日本語と東の日本語のような大区分に始まり、さらにいくつもの中間段階の区分を経て、やがて狭い地域社会の日本語に至り、ついにはそれ以上区分することのできない究極の日本語、すなわち個人語としての日本語にたどりつく。捉え方の方向は、上位から下位へと、広い地域から狭い地域へと、集団から個人へと、より具体的な像を結ぶ方向に向かっているとみえる。

一方、その反対の方向性をもつ視点に立つというのは、究極の日本語であり、きわめて具体的な日本語である個人語の側から、逆に上位の日本語の方向を展望しようとすることである。ことばを差異性の観点からつきつめると個人語に行きつくのであるから、逆にことばの共通性に注目して、個人から集団へと、狭い地域から広い地域へと、下位から上位へと均一化・統合に向かっていく過程をみよう、というわけである。

上位の日本語というのは、その通用範囲の広さはいろいろであろうが、各地にその存在が認められている地域共通語のことであり、ひいてはその最上位にある全国共通語のことである。地域共通語が、通用範囲に限りのある各

地の日本語であるのに対して、全国共通語は、人々のコミュニケーションの便宜に対する必要や欲求を最も広い範囲において満足させ、地域を超越して現実に通用している日本語である。全国共通語は、特定の地域との結び付きから解放された日本語ということもできる。^{注2)}

上に述べたように、富良野市と札幌市のことばは、全国各地から入植者が持ち込んだ諸方言が混淆しながら形成されたという点で、特殊な成立事情をもっている。相異なる日本語が接触しつつ、コミュニケーションの必要から共通のことばが模索されていったに違いない。すでに渡島半島や沿岸部で使われていたことばも、その現実的な通用力によって採用されていったはずである。今日の両地域のことばは、このような歴史的背景の延長線上に位置している。共通のことばを使用することについては、その意識の発達した地域とみてさしつかえなからう。

ことばの共通性は、実際のコミュニケーション場面において、言語使用の前提となるもっとも重要なことである。したがって、共通のことばについての議論は、話者の言語使用とその意識の観点から把握されなければ、十分なものとはなりえない。この意味で、言語使用の基本単位・主体としての個人を対象にして、共通のことばを実際にどのように、どのくらい使うか、そのことばの使われ方についてどのような意識をもっているか、等々について調査時に詳細にたずねておくことは、重要な意味をもっている。また、調査結果を分析する際には、どのような質問法によって、どのような回答を得ているのか、そこからどのような情報を引き出しているのか、いつも反省をこころがける姿勢が必要である。

2. 調査の概要

国立国語研究所員を中心に組織された研究グループは、1986年度から1988年度までの3年間、文部省科学研究費補助金・総合研究（A）の交付を受けて、「北海道における共通語化および言語生活の実態」（代表者 江川清）を課題名とする一連の調査研究を実施した。この報告は、そのうち富良野市と

札幌市における社会言語学的調査で得た資料の一部を集計し、分析を加えたものである。^{注3)}

2.1. 調査対象

調査対象地域は、富良野市を農村型地域社会の代表、札幌市を都市型地域社会の代表として選定した。都市化の進行に隔差のみられる両地域社会を対比的に捉えようとしたからである。^{注4)}

第1章でも簡単に触れたが、富良野市は、北海道中央部の上川支庁管内にある人口3万人弱の小地域社会である。明治30年に入植が開始され、町村合併を経て昭和41年に市制施行、北海道で29番目の市となった。市の中心部の市街化地域とその周辺に広がる農村地域からなるが、近年、スキー場をはじめとして観光地化が進み、外部と接触する機会もしだいに増えつつある。

一方の札幌市は、言うまでもなく石狩平野の南西部に位置する北海道随一の大都市である。道庁所在地、石狩支庁所在地として、政治、経済、文化など各方面の中枢をなし、現在では人口150万人を越す政令指定都市となっている。ちなみに総人口では、富良野市の50倍以上の規模である。

調査対象者は、それぞれの地域の、15歳以上70歳未満の住民から無作為に抽出した。ただし、富良野市では単純無作為抽出を行ったが、札幌市では調査の手間の関係から、二段階に分けて無作為抽出を行っている。すなわち、第一段階で地区を抽出し、第二段階で人を抽出するという方法である。サンプル数は、富良野400人、札幌500人である。

2.2. 調査方法

調査時期は、富良野市が1986年10月～11月、札幌市が1987年9月と1988年1月～2月（補充調査のため）である。

調査の方法は、個別面接調査と郵送留置アンケート調査の併用である。手順は、まず実際に調査員が現地で面接調査を行うのに先立って、挨拶・依頼状とアンケート用紙を被調査者宅に郵送し、あらかじめ簡単な質問に回答し

ておいてもらう。次に、各戸を訪問してそれを回収しながら同時に面接調査の依頼をして実施する、という順序である。

調査の達成状況は、面接・アンケートとも完了した人を有効回答者とし、富良野299人（回収率74.8%）、札幌351人（回収率70.2%）であった。

調査の概要を表1に、有効回答者の属性構成を表2にまとめて示す。

2.3. 調査内容

アンケート調査では、言語生活、対人行動、言語行動意識、方言・標準語意識、社会意識などの項目について、被調査者がふだん考えていることをあまりむずかしく考えないように前置きをして、回答を求めている。

個別面接調査では、語彙、音声・アクセント、文法、語彙・文法の方言意識、対人行動、父祖の出身地への関心、居住歴・学歴などの項目について、やはりふだんのことばづかいを自然な調子で言ってもらったり、ふだん感じていることを率直に述べてもらったりしている。なお、あらかじめ被調査者の了解を得て、音声・アクセント項目を中心に、なるべく全体にわたって録音をとり、後で聞き直しができるようにしている。

2.4. 調査者

個別面接調査に参加した調査者は、次の通りである。（敬称略）

[富良野調査] 江川清、野元菊雄、杉戸清樹、米田正人、佐藤亮一、沢木幹栄、小林隆、相澤正夫、小野米一、菅泰雄、南芳公、吉見孝夫、徳川宗賢、真田信治、高田誠、志部昭平、日向茂男、鈴木敏昭、菱沼透、村山昌俊、尾崎喜光、中島孝幸、堤真木、松田謙次郎、永田高志。

[札幌調査] 江川清、野元菊雄、杉戸清樹、米田正人、佐藤亮一、沢木幹栄、小林隆、相澤正夫、水野義道、小野米一、菅泰雄、南芳公、吉見孝夫、徳川宗賢、真田信治、志部昭平、日向茂男、鈴木敏昭、菱沼透、村山昌俊、吉岡泰夫、尾崎喜光、中島孝幸、金沢裕之、渋谷勝巳、宮治弘明。

表1 富良野市・札幌市における調査の概要

	富良野市	札幌市
抽出方法	単純無作為抽出	二段階無作為抽出
人口（1986年）	27,942人	1,567,724人
人口密度（人/km ² ）	46.4人/km ²	1,402.3人/km ²
サンプル数	400人	500人
有効回答者数	299人	351人
回収率	74.8%	70.2%
調査時期	1986年10月30日～11月10日	1987年9月17日～9月28日 1988年1月28日～2月11日
調査方法	個別面接 郵送留置アンケート回収	個別面接 郵送留置アンケート回収
調査対象	15歳以上70歳未満の男女	

表2 有効回答者の属性構成（年齢×性別）

年齢	富良野市			札幌市		
	男 人数(%)	女 人数(%)	合計	男 人数(%)	女 人数(%)	合計
15—19	11(42.3)	15(57.7)	26	21(52.5)	19(47.5)	40
20—29	14(36.8)	24(63.2)	38	37(52.1)	34(47.9)	71
30—39	38(55.1)	31(44.9)	69	30(40.5)	44(59.5)	74
40—49	19(33.9)	37(66.1)	56	31(46.3)	36(53.7)	67
50—59	36(59.0)	25(41.0)	61	35(55.6)	28(44.4)	63
60—69	21(42.9)	28(57.1)	49	15(41.7)	21(58.3)	36
合計	139(46.5)	160(53.5)	299	169(48.1)	182(51.9)	351

3. 日常言語生活における共通語意識・方言意識

北海道の人は、北海道のことばに対して非常に自信を持っている、とは、しばしば言われることである。小野米一（1980）は、この点に関してその冒頭で、「北海道では、『方言』の生活をしているという意識が、きわめて薄い。ふだん日常の生活のなかでは、自分たちのことばが方言であるか標準語であるかというような意識を、ほとんどもつこともない。むしろ、標準語を使うのが当然であり、毎日、標準語の生活をしているときえ考えられている。」と、指摘しているほどである。

たとえば、真田信治（1987）によれば、『日本言語地図』をもとに都道府県別の標準語形分布率を算出し、全国順位をつけると、第一位から第十位までは、東京、埼玉、栃木、神奈川、群馬、長野、北海道、山梨、静岡、千葉の順であるという。関東とその近県に混じって、北海道が第七位に入っていることが注目され、北海道では標準語が多く使われている、という定評を裏付ける結果となっている。

ここでは、まず、郵送留置アンケート調査項目の中から、被調査者の日常生活における標準語意識・方言意識に関する部分についてみていくことにする。なお、アンケート調査では、直感的な判断が下しやすいように、「全国共通語」と同じ意味で「標準語」の方をワーディングに使っている。

3.1. 自分のことばについての意識

3.1.1. どの程度標準語で話すか

「あなたはどの程度標準語で話しますか。」という質問に対し、「(1)いつも標準語で話す。(2)いつも方言で話す。(3)標準語と方言とが混ざる。(4)相手や場合によって、標準語や方言を使い分ける。」の四つの選択肢の中から、最もよく当てはまるものを選ぶ項目である。結果は、図1を参照。

この項目は、自分自身のふだんの言語使用に対して内省によって評価を求めている。「いつも標準語で話す」が、富良野36.1%、札幌22.8%と、富良野の方が標準語使用について強い自信をのぞかせているのが目を引く。「相手や

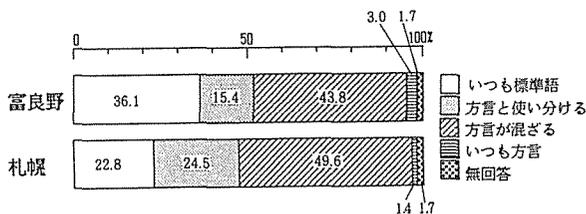


図1 どの程度標準語で話すか

場合によって、「使い分ける」が、富良野15.4%、札幌24.5%と、逆に札幌の方が高いのは、都市化が進んでいる札幌における対人関係の複雑さをうかがわせる。さすがに富良野・札幌とも「いつも方言で話す」という人はわずかであるが、「標準語と方言が混ざる」という控えめな回答が、それぞれほぼ半数近くを占めているのは、予想以上に冷静な自己評価といえそうである。^{注5)}

3.1.2. 方言を話すとすれば、それはどこのことばか

前の質問に対して、「いつも標準語で話す」と回答した人、および無回答の人を除いて、それ以外の回答をした人を対象に、「あなたの話す方言はどこのことばですか。」と質問し、「(1)富良野／札幌のことば。(2)北海道全体のことば。(3)その他（具体的に記入）。」の中から選ぶ、あるいは具体的に地域名を記入してもらう項目である。結果は、図2を参照。

「富良野／札幌」は、要するに「地元のことば」ということである。実際の回答には、この他「北海道全体のことば」「地元+北海道全体のことば」「東北地方のことば」「浜ことば（北海道海岸方言の通称）」「その他の単地名」があった。「東北地方のことば」と回答した人の出身地についてみると、富良

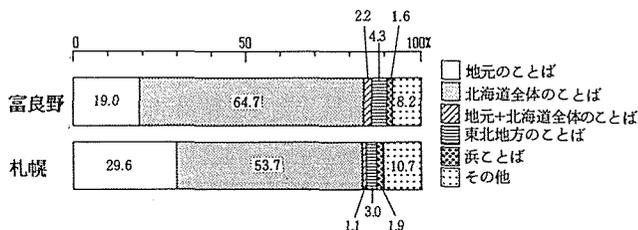


図2 方言を話すとすれば、それはどこのことばか

野で8名のうち6名、札幌で8名のうち5名が東北地方出身者である。「浜ことば」と答えた人の出身地は、富良野は3名とも道内、札幌は5名のうち4名が道内、1名が地元札幌の出身である。

「地元のことば」と「北海道全体のことば」を足すと、富良野が83.7%、札幌が83.3%で非常に接近した数字となる。両地域とも、自分の話す方言を「北海道全体のことば」とみなす人の方がかなり多いが、この傾向は富良野により顕著にみられる。富良野の方に、「北海道地域共通語」の話者として自己のアイデンティティを求める人が多く存在するといえるかもしれない。おそらく、札幌にも同様の傾向がみられるだろうが、札幌の人の方が「地元札幌のことば」と「北海道全体のことば」との間に隔たり意識をもっておらず、どちらの回答をしても実質的な違いがないことから、あまりこだわらずに回答している可能性もある。あるいは、だからこそ冷静に細かい違いを意識して回答しているという可能性もありそうだが、ここではいずれも推測の域を出ない。

3.2. 地元のことばについての意識

3.2.1. 地元のことばは標準語と比べてどうか

「あなた自身のことばは別として、この富良野／札幌のことばは標準語と同じだと思えますか。それとも違っていていると思えますか。」という質問に対し、「(1)標準語と全く同じ。(2)標準語とあまり変わらない。(3)標準語と少し違う。(4)標準語とかなり違う。(5)わからない。」の五つの選択肢から選ぶ項目である。結果は、^{注6)}図3を参照。

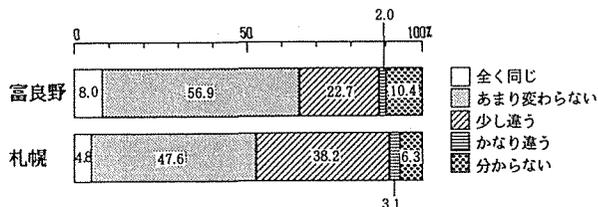


図3 地元のことばは標準語と比べてどうか

この項目は、自分の生活している地域社会、つまり地元のことばについて標準語と比べてどのように見ているか、各自に異同の判定を求めているものである。「全く同じ」「あまり変わらない」という標準語との同一視傾向のみられる回答では、富良野がそれぞれ8.0%、56.9%、札幌が4.8%、47.6%と、富良野の方が多い。反対に、「少し違う」「かなり違う」という標準語との相違視傾向のみられる回答では、富良野がそれぞれ22.7%、2.0%、札幌が38.2%、3.1%と、札幌の方が多くなっている。但し、富良野・札幌とも、同一視傾向の方が半数をこえる優勢な勢力であることに留意する必要がある。ここでは、「少し違う」という回答への票の集まり方に、両地域の差がいちばんよく表れているようだ。また、「わからない」と答えて判定を回避したり、保留したりする人が富良野の方にやや多いのが目につく。

富良野・札幌とも、大きな変化の流れとしては、同一視傾向から相違視傾向の方向に動いているのではないかと考え、年齢層別に集計してみた。結果を、図4に示す。

予想通り、富良野・札幌とも若年層に向かって同一視傾向の割合が減少し、逆に相違視傾向が増加しつつあるといえる。しかし、札幌の20歳代を唯一の例外として、残りはすべて依然として同一視傾向の方が相違視傾向を上まわ

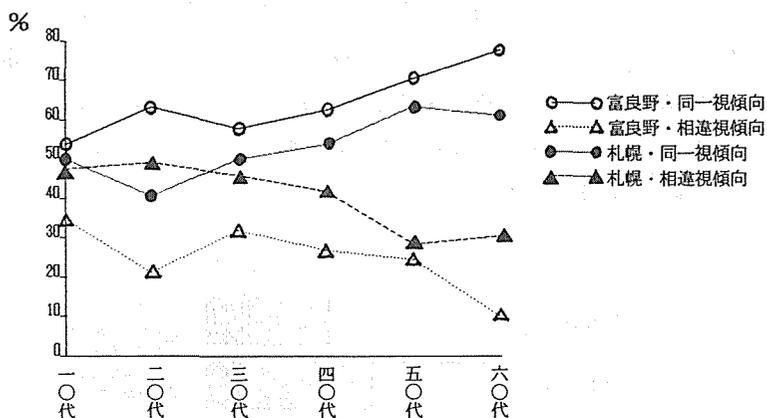


図4 標準語と同じか違うか(年齢層別)

っていることも事実である。

富良野と札幌を比較すると、すべての年齢層において、同一視傾向の割合は富良野の方が高く、逆に相違視傾向の割合は札幌の方が高い。同一視傾向の割合をみると、たとえば、札幌の60歳代のレベル（60%台前半）と、富良野の40歳代のレベルがほぼ同じであることがわかる。また、相違視傾向の割合では、札幌の40歳代のレベル（40%台）に、富良野では若年層でも届いていないことがわかる。

札幌では、若年層で二つの傾向がほぼ肩を並べるところまでいっているのに対して、富良野では、同一視傾向は確かに減少したが、相違視傾向がその割に十分に伸びていないといえよう。

3.2.2. 札幌のことばと東京のことばは、どちらが標準語（的）か

前の質問に続く、「では、札幌のことばと東京のことばとでは、どちらが標準語だと思いますか。」という質問に対し、「(1)札幌の方がより標準語的だと思う。(2)東京の方がより標準語的だと思う。(3)どちらも標準語であることには変わりはない。(4)どちらも標準語とは違う。(5)わからない。」の五つの選択肢から選ぶ項目である。但し、この項目は、一年目の富良野調査と二年目の札幌調査との間に、選択肢の修正が行われた。ここに示したのは札幌の方のもので、富良野では「どちらも標準語とは違う」という選択肢を設けていなかった。したがって、単純に両地域を比較するのが危険であることをことうたううえで、結果を、図5に示す。

富良野では、「わからない」という回答が29.1%と、札幌の15.4%に対して

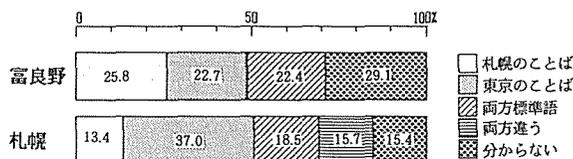


図5 札幌と東京では、どちらのことばが標準語か

2倍に近い値を示している。おそらくこの中には「札幌のことば」も「東京のことば」も標準語とは違うから断定できないと考えた人が、該当する選択肢がないために判断を避けた結果がかなり含まれていると思われる。「判定保留」という意味での「わからない」である。アンケート用紙の隅にその旨を、たとえば「両方とも標準語とは違う」のように記入してくれた人がいたのかもしれない。翌年の札幌調査では、上に述べたように「どちらも標準語とは違う」という選択肢が追加されている。札幌でこの選択肢を選んだ人が15.7%いるが、標準語に対して比較的厳しい基準をもっている人たちが、札幌のことばだけでなく東京のことばまでも標準語としては認めがたい、としたものであろう。

どちらか一方に判定を下した人について両地域を比較してみると、「札幌の方」とした人が、富良野で25.8%と、札幌の13.4%の約二倍であるのに対して、「東京の方」とした人は、富良野が22.7%、札幌が37.0%と逆転している。富良野では、「札幌の方」が「東京の方」をわずかに上まわっているものの、両者がほぼ肩を並べているのに対して、札幌では、前者は後者の約三分の一程度にすぎない。ここには、富良野の札幌志向、つまり自らが属する地方の中心都市を、まず第一に強く意識する傾向がみてとれる。また、たとえ地元のことばであっても身びいきせず、覚めた判定を下している大都市札幌の一面がのぞいているようにも思う。^{注7)}

「どちらも標準語であることには変わりはない」については、富良野22.4%、札幌18.5%と、両地域にあまり差はない。このグループは、標準語に対して比較的緩い基準をもっている人たちであろう。おそらく、「札幌の方」と断定するほどでもないが、「東京」ともいいにくいという人と、「東京の方」と断定するほどでもないが、「札幌」ともいいにくいという人とが、一緒になっていると考えられる。分析の目的によって扱いを変えなければならないグループである。

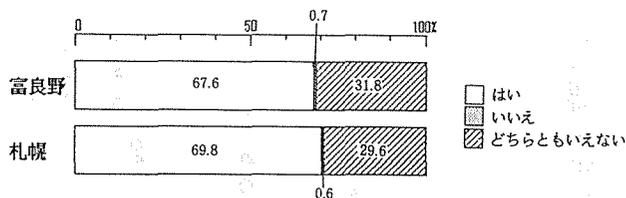


図6 地元のことばが好きか

3.2.3. 地元のことばが好きか

さらに前の質問に続けて「あなたはこの土地のことばが好きですか。」と質問し、「(1)はい。(2)いいえ。(3)どちらともいえない。」の三つの選択肢から選んでもらう項目である。但し、細かく言うと、札幌では質問文の「この土地」を具体的に「札幌」と変えている。結果を、図6に示す。

この項目は、自分の住んでいる地域社会のことばに対する各自の感情をたずねたものである。「いいえ」という否定的な回答が、富良野・札幌各2名と極端に少ないのが印象的である。「はい」つまり好きだと思っている人は、富良野67.6%、札幌69.8%とほとんど差がなく、三人に二人は、はっきり好きだと思っていることになる。残りの三分の一が「どちらともいえない」という感情の表明を差し控えた、またはあまり関心のないグループである。

居住地のことばにたいする感情の強弱は、その人の出身地と関係があるのではないかと考え、大づかみに出身地別に集計した結果を、図7に示す。

現在の居住地つまり「地元」出身から、しだいに「周辺の町」「北海道」「東北地方」「その他」と出身地の範囲を広げてゆき、「好き」および「どちらともいえない」の回答率がどうかかわるか、富良野・札幌を比較したものである。札幌については、集計の都合上、周辺の町を北海道の中^{注8)}に含めてある。

富良野・札幌とも、地元出身者は7割以上の人々が「好き」と答えている点で一致するが、範囲を広げてゆくと両地域で違いが出てくる。富良野では、「好き」がしだいに減少し、東北地方出身者で4割台まで落ちる。一方、札幌では、東北地方出身者まで一律に7割台を保っている。また、その他の地域の出身者が、富良野では、北海道出身者と同水準であるが、札幌では、4

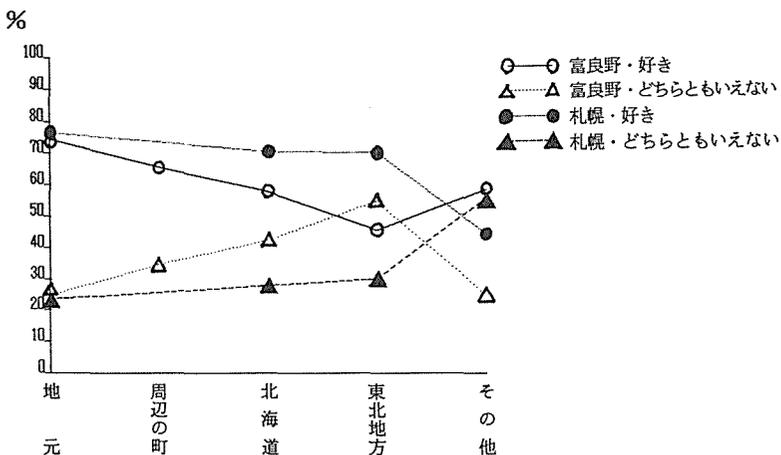


図7 地元のことばが好きか(出身地別)

割合に落ちていることが目を引く。裏を返せば、「どちらともいえない」という人の割合が、富良野では、東北地方出身者で最大になるのに対して、札幌では、北海道・東北地方以外の出身者で最大になるということである。

札幌のことばに対しては、東北地方出身者までの範囲で好感をいただていることが伺えるが、北海道・東北地方以外の出身者になると、半分くらいは無関心とみてよさそうである。富良野のことばに対する東北地方出身者の態度については、このデータだけでは十分なことはいえないが、札幌志向の一種の反動があらわれているのかもしれない。

3.3. 本人の標準語使用意識と調査員判定のずれ

3.3.1. 被調査者のことばに対する調査員判定

これまではアンケート調査の結果のみを扱ってきたが、ここでは面接調査の結果を参照して、それとの突き合わせを試みる。アンケート調査は、基本的には、本人の内省による自己評価・自己申告とみてよいが、それと調査員が実際にその人のことば・言語行動を観察して評価した結果とが、どのくらい一致しているか、ずれているかをみようというわけである。

面接調査票の末尾には、面接調査が終了した時点で、調査員がその調査の

状況についての記録を残す欄が設けてある。その一つが「調査全般の被調査者のことば」（調査員判定）の項目である。判定は、調査員の印象・判断に任されているが、次の選択肢から一つを選ぶことになっている。

正しい 共通語	共通語だがどこ となくちがう	共通語が 混ざる	共通語を 話さない	共通語が 通じない
1 → 2 ←	3 → 4 ←	5 → 6 ←	7	8

調査員判定の結果を、図8に示す。評価の基準が同じではないが、比較のために本人の自己評価の結果の図1を再掲する。いずれも、グラフの左寄りが共通語的、右寄りが方言的（非共通語的）という配列順である。

まず、調査員判定の結果をみよう。「共通語が通じない(8)」は一人もなく、「共通語を話さない(7)」が富良野で2名いた。それ以外では、「共通語だがどことなくちがう(3)」という判定が最も多い。これに「ランク(2)」、「ランク(4)」の順で続くことは富良野・札幌に共通である。その次に、富良野では「共通語が混ざる(5)」「正しい共通語(1)」「ランク(6)」と続くが、札幌では「正しい

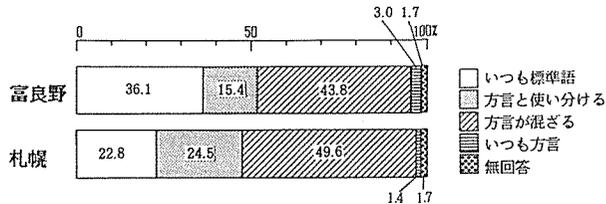


図1 どの程度標準語で話すか

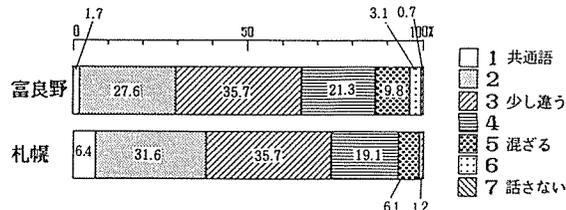


図8 被調査者のことばについての調査員判定

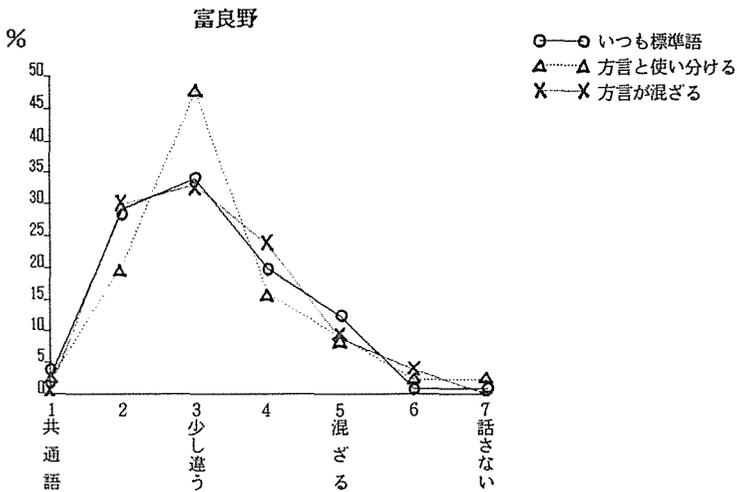


図9 自己評価と調査員判定のずれ(富良野)

共通語(1)「共通語が混ざる(5)」「ランク(6)」と続く。札幌の方が富良野より「正しい共通語(1)」「ランク(2)」が多めであること、富良野・札幌とも判定基準の中央の「ランク(4)」までに9割前後の人が収まってしまふことが注目される。

次に、自己申告(図1)と調査員判定(図8)とを比較してみよう。富良野では、「いつも標準語」と自己採点する人が多いわりには、調査員判定の「正しい共通語(1)」「ランク(2)」が伸びていない印象である。一方、札幌では、この点に関する自己採点と調査員判定のずれが少ない。富良野の人の方が、札幌の人よりも自分のことばに対する採点・評価が甘く、自信家になりがちだといえそうである。

3.3.2. 自己評価と調査員判定のずれ

自己評価と調査員判定がどのくらい一致しているか、あるいはどのようにずれているかを、もう少し詳しくみるためにクロス集計を行った。結果を、図9、図10に示す。

図9は富良野、図10は札幌についてである。折れ線グラフの山の頂上の位置に注目したい。「いつも標準語」の頂上が左寄りにあり、次に「方言と使い

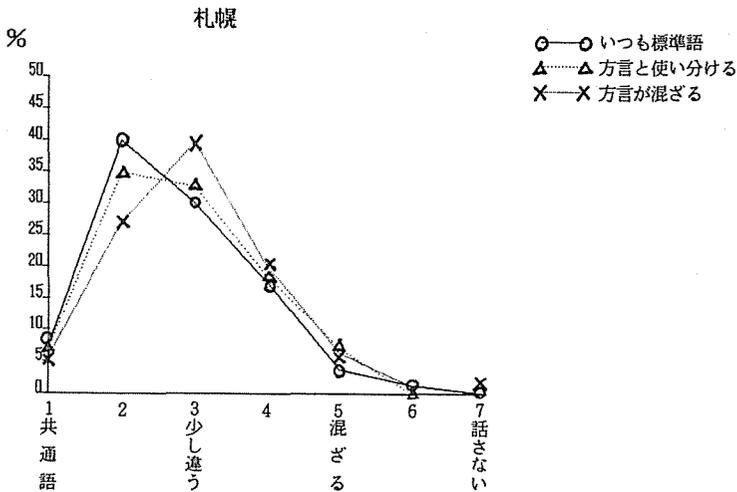


図 10 自己評価と調査員判定のずれ(札幌)

分ける」の頂上が間に来て、「方言が混ざる」の頂上がいちばん右寄りという順であれば、自己評価と調査員判定のずれが少ないと考えられる。

富良野・札幌とも、三つの頂上の尖り方に違いはあるものの、その位置は「ランク(2)」「共通語だがどことなくちがう(3)」のいずれかにある。総体的に調査員判定が高い方に偏っていることは、このグラフからもよくわかる。しかし、上に述べた基準に照らしてみると、札幌の方は大体そのような頂上の配置になっているのに対し、富良野は頂上が三つとも「共通語だがどことなくちがう(3)」に集中し、しかも、「いつも標準語」と「方言が混ざる」の山の形がほとんど重なる結果となっている。

「いつも標準語」とする人について富良野・札幌を比較すると、札幌の方が高い調査員判定をうける傾向にある。「方言と使い分ける」についても同様の傾向がみえる。「方言が混ざる」については、両地域ともあまり変わらない。

以上から、本人は標準語を使っているつもりでも、第三者から見ると必ずしもそうではないという人は、札幌よりも富良野の方に高い割合で存在する、といってほぼ間違いのないと思われる。

3.3.3. ことばの使用意識・使用実態のずれと都市化度の関係

被調査者の内省によることばの使用意識と、実際の言語行動における使用実態とのずれに関する情報は、調査の結果を分析する際に考慮すべき重要なことからである。自己に対する観察や評価の厳しい人・地域から得た調査結果と、反対にそれが甘い人・地域から得た調査結果とを単純に対比させて結論を出すわけにはいかないであろう。

ここでも、富良野と札幌では、標準語の使用意識と使用実態のずれに程度差の認められることがわかった。おそらくこの差は、両地域の都市化の度合い（都市化度）の差に、その原因を求めることができるだろう。都市に生活する人間ほど、様々なタイプの人間と接触する機会をもち、同時に様々なことばと接触することになる。自分とは異質なものに触れることによって、自らを客観的に見る目が養われるし、情報量の多いことも、ものごとを現実的に捉えるための材料を提供することに貢献する。このようなわけで、一般に地域の都市化度が高まるほど、人々の自己観察や自己評価が厳しく現実的になると推定される。^{注9)}

以上から、「地域社会の都市化が進むほど、人々の言語使用についての意識と実際の言語行動とのずれが小さくなる。」という仮説を立てることができよう。北海道内陸方言という点で共通の基盤に立つ富良野・札幌のことばを、この仮説のような観点から、さらに対比的かつ総合的に追究する必要があると思われる。

4. 北海道共通語の使用とその意識

第3章では、被調査者のふだんの言語生活における標準語意識・方言意識について、個々の言語形式には立ち入らずに、総合的な自己評価として扱った。その結果、ことばの使用実態とその意識との間には、かなりのずれがみられることがわかった。ここでは、具体的な五つの言語形式をとりあげて、実際の使用状況とそれらの使用意識の関係について、やはり両者のずれの観点から分析を加えることにする。

ここでとりあげる5項目は、いずれも北海道で広く使われているといわれる全国共通形でない言語形式（非全国共通形と呼ぶ）である。語彙の面から2項目（①シバレル、②手袋をハク）、文法の面から3項目（③書カサラナイ、④笑ワサツタ、⑤オキレ）である。この5項目を選んだ理由は、これらについてのみ、使用地域意識をたずねる項目が別に立てられていたことによる。北海道共通語あるいは北海道語という観点から、過去の文献の中で繰り返し話題にされてきた言語形式ということで、今回の調査では特に使用地域意識までたずねたものである。

なお、この章でとりあげる項目は、すべて面接調査によっている。

4.1. 使用率

4.1.1. 質問文と回答法

面接調査の冒頭で、「ふだん話していることばづかいを、自然な調子で聞かせてください。」と前置きして、各項目の質問に入っている。

①シバレル、②手袋をハク、は、いわゆる「なぞなぞ式」によっている。

①シバレルは、まず、「冬ひどくさむいことをどうだと言いますか。」とたずね、シバレル、サムイ、その他の回答を期待する。シバレルという回答が得られないときは、この語形を発音してみせ、次のような提示リストの中から該当するものを選んでもらう。

1. 自分でも、いま使っている。
2. 以前は、自分も使っていた。
3. 自分は使わないが、ひとが使うのを聞くことがある。
4. いまは聞かないが、以前聞いたことがある。
5. まったく知らない。聞いたこともない。

また、シバレルという回答が「なぞなぞ式」だけで得られたときも、念押しのかたちで、提示リストの中から該当する項目を選んでもらうことにして

注10)
いる。

②手袋をハクは、「『手に手袋を……』、それからどう言いますか。」とたずね、ハク、ハメル、スル、ツケルなどの回答を期待する。ハクという回答が得られないときは、シバレルのときと同じようにこの語形を提示して、同じ手順で使用状況の確認をする。

③書カサラナイ、④笑ワサツタ、は、「提示確認式」によっている。これは、「なぞなぞ式」でうまく目的の語形が回答されなかったときに、次善の策として用いる方法と基本的には同じである。

③書カサラナイは、「『こんなペンではうまく書かさない。』こういうふうに『書カサラナイ』という言い方をしますか。」とたずね、先の提示リストの中から該当するものを選んでもらっている。

④笑ワサツタも、同様に「『あんまりおかしくってどうしても笑わさった』こういうふうに『笑ワサツタ』という言い方をしますか。」とたずね、提示リストから選んでもらっている。

⑤オキレは、「選択肢式」によっている。これは、「『早く起きろ／早く起きれ／早く起きい』どう言いますか。」とたずね、選んでもらう方法である。この項目については、提示リストでの確認をしていない。

4.1.2. 使用状況の項目間比較

上で述べた方法によって得られた結果を、項目間の比較ができるように比較帯グラフによって示す。図11が富良野、図12が札幌である。

提示リストの「1～5」が、順に「使う」「使った」「聞く」「聞いた」「知らない」にあたる。⑤オキレについては、提示リストによる確認をしていないので、「オキレ」を回答した人（複数回答者の「オキレ」も含む）の百分率だけを示し、それ以外は便宜的に「無回答・その他」に入れた。参考までに「オキレ」と「オキレ以外の回答」、つまり「オキレ」の競合形の使用状況を、図13に示す。但し、ここでは複数回答者の中の「オキレ」は、そこに含め^{注11)}たままにしてある。

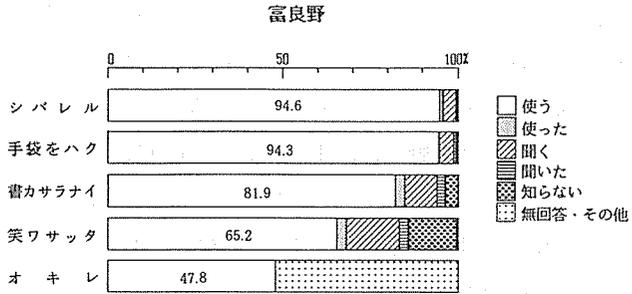


図 11 北海道共通語の使用状況（富良野）

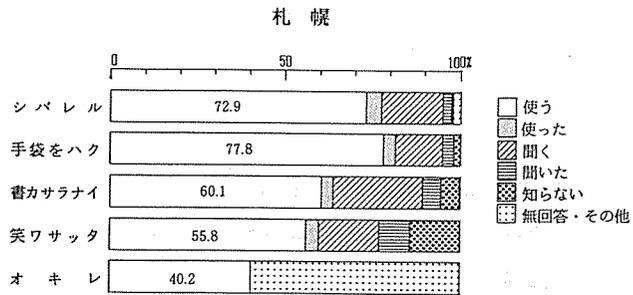


図 12 北海道共通語の使用状況（札幌）

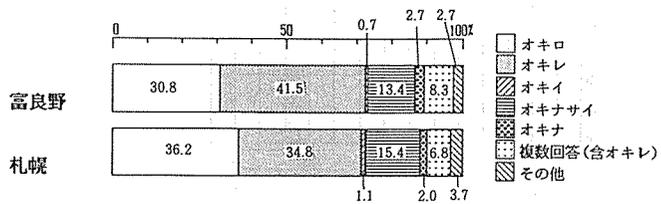


図 13 「オキレ」の競合形

図11, 図12で, 「使う」は, いわゆる「使用語」にあたり, 「使った」「聞く」「聞いた」は「理解語」にあたると思われる。したがって, 使用率は「使う」という回答の百分率で示されることになる。^{注12)}

使用率をみると, 富良野では, ①シバレル (94.6%), ②手袋をハク (94.3%)、③書カサラナイ (81.9%), ④笑ワサッタ (65.2%), ⑤オキレ (47.8%)の順である。札幌では, ②手袋をハク (77.8%), ①シバレル (72.9%), ③書カサラナイ (60.1%), ④笑ワサッタ (55.8%), ⑤オキレ (40.2%)の順で, ①と②の順位が逆転している。

理解語の中の様子をみると, いずれも「聞く」つまり「自分は使わないが, ひとが使うのを聞くことがある。」という, 現在の周囲の使用を報告しているものの割合が高いことに気付く。一方, 「使った」「聞いた」という過去の使用を報告したものの割合は比較的低い。この傾向は, 富良野の方にやや顕著にみられる。

4.1.3. 使用状況の富良野・札幌間比較

ここでは, 項目ごとの使用状況を富良野・札幌間で比較してみよう。比較棒グラフを, 図14に示す。

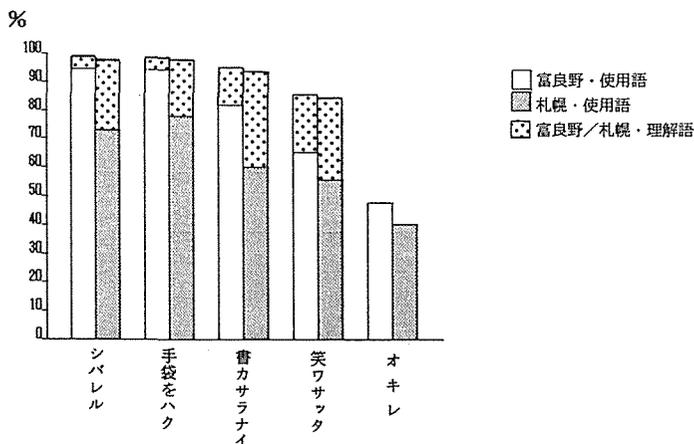


図14 使用状況の富良野・札幌間比較

使用率は、5項目すべてについて、富良野の方が札幌よりも高い値を示している。富良野を100としたときの、札幌の割合を計算し、両者が接近している項目から順に並べると、④笑ワサツタ (85.6)、⑤オキレ (84.1)、②手袋をハク (82.5)、①シバレル (77.1)、③書カサラナイ (73.4) となり、④笑ワサツタと③書カサラナイとでは10%強の開きがある。

一方、理解語まで含めて比較してみると、両者の間にはほとんど差がないことがわかる。富良野／札幌の対比で、①シバレルは、99.7／97.4、②手袋をハクは、99.3／98.0、③書カサラナイは、96.3／94.3、④笑ワサツタは、85.6／85.5、となっている。

札幌では、いずれの項目も富良野より使用率が低いが、その低い分がそのまま理解語の方に移っているとみることができる。この4項目の範囲でみる限り、「知らない」「無回答・その他」の割合は、富良野・札幌間で差がない。しかも、その割合は最も大きい④笑ワサツタでも15%程度に過ぎない。これら4項目は、いずれも両地域でかなりよく通用していることばであるとい^{注13)}てよかろう。

4.2. 使用地域意識

4.2.1. 質問文と回答法

面接調査では、語彙・文法項目への追加質問として、先の5項目に限って使用地域の広がりについての意識をたずねている。

たとえば、①シバレルについては、「冬ひどく寒いことを『シバレル』という言い方は、つぎのうちどこのことばだと思いますか。あなたのふだんの感じを知りたいので、むずかしく考えずに選んで下さい。」とたずね、次のような提示リストの中から選んでもらっている。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. 富良野独特のことばだと思う。(富良野で)
札幌独特のことばだと思う。(札幌で)2. 上川・空知地方のことばだと思う。(富良野で) |
|--|

道央（石狩・空知地方）のことばだと思う。（札幌で）

3. 札幌のことばだと思う。（富良野で）

北海道の海岸部のことば（浜ことば）だと思う。（札幌で）

4. 北海道全体のことばだと思う。

5. 東北地方や北海道のことばだと思う。

6. 入植前の故郷のことばだと思う。（富良野で）

北海道に来るまえの故郷（ふるさと）のことばだと思う。（札幌で）

7. 全国の共通語だと思う。

8. このことばを知らない。

②手袋をハク、③書カサラナイ、④笑ワサツタ、⑤オキレ、も同様の方法で回答を得ている。但し、⑤オキレについては、「『見レ』とか『起キレ』という言い方はどうですか。」のように、同類の「見レ」といっしょにたずねている。

提示リストは、地元のことばから、しだいに地域が広がっていくような配列になっている。また、一年目の富良野と二年目の札幌で、若干の手直しがなされている。「北海道の海岸部のことば（浜ことば）だと思う。」をリストに加えたことが、もっとも大きな変更点である。

4.2.2. 使用地域意識の項目間比較

上で述べた方法によって得られた結果を、項目間の比較ができるように比較帯グラフによって示す。図15が富良野、図16が札幌である。

富良野・札幌とも、「北海道全体のことば」とする回答がかなり優勢であるが、この傾向は語彙項目の方に顕著である。文法項目では、「全国の共通語」とする回答が「北海道全体のことば」にせまる勢いをみせている。

①シバレルのようないかにも北海道的な語彙項目は、さすがに「全国の共通語」とする人は少ないが、③書カサラナイ、④笑ワサツタ、⑤オキレのような文法項目になると、「全国の共通語」という回答が増える傾向を示す。お

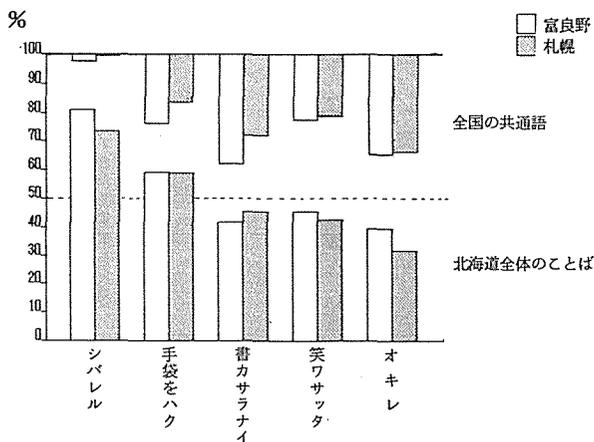


図17 北海道共通語・全国共通語，どちらの意識か

いて10%から15%程度みられる。これが第三の勢力である。

札幌では、「北海道の海岸部のことば（浜ことば）」が，選択肢に加えられたが，⑤オキレ，①シバレル，④笑ワサッタ，では，10%前後の回答を集めている。富良野調査ではこの選択肢を入れておかなかったので，比較することができない。この点は惜しまれる。

富良野・札幌とも，地元やその周辺の地域のことばとする回答は，きわめて少ない。

以上から，「北海道共通語」という意識が人々の間に広く浸透していることがうかがえると同時に，「全国共通語」とする意識もやはり無視しがたくはたらいっているように思う。

4.2.3. 北海道共通語・全国共通語とする回答の富良野・札幌間比較

ここでは北海道共通語（つまり裏返せば，非全国共通形）を，被調査者が「北海道全体のことば」と意識しているか，あるいは「全国の共通語」と意識しているか，の二点にしぼって，富良野・札幌間の比較を行う。

図15，図16から，「北海道全体のことば」と「全国の共通語」の部分だけを抜き出して，対比的に示したのが，図17である。

全体的にみて、富良野と札幌はほとんど同じような傾向を示す。「全国の共通語」とする人は、各項目とも富良野が札幌を下まわることはない。②手袋をハク、③書カサラナイ、の2項目についてだけ、富良野の方が若干多い点が目立つ。「北海道全体のことば」とする人も、③書カサラナイを唯一の例外として、すべて富良野の方が若干多くなっている。但し、札幌では「浜ことば」という新たな選択肢に票が流れてしまった可能性があるため、あまり断定的なことは言えないだろう。

4.3. 「使う」と答えた人の使用地域意識

4.2. では、被調査者全員の使用地域意識を扱ったが、ここでは五つの非全国共通形を「自分でも、いま使っている」と答えた人だけをとりあげ、それらを「北海道全体のことば」と意識している人、および「全国の共通語」と意識している人がどのくらいいるのか、調べてみる。

集計結果を、比較棒グラフによって示す。図18が富良野、図19が札幌である。

「北海道全体のことば」と意識している人は、富良野では、①シバレル(76.6%)、②手袋をハク(56.2%)、③書カサラナイ(36.5%)、④笑ワサッタ(33.1%)、⑤オキレ(20.0%)の順である。これは、札幌でも、①シバレル(57.8%)、②手袋をハク(47.0%)、③書カサラナイ(28.2%)、④笑ワサッタ(26.5%)、⑤オキレ(13.1%)の順で変わらない。また、全体に札幌の方が富良野よりも、2、3割程度低めの数字になっているが、項目間の比率は両地域とも非常によく似ている。

「全国の共通語」と意識している人は、富良野では、③書カサラナイ(31.4%)、②手袋をハク(22.7%)、④笑ワサッタ(18.4%)、⑤オキレ(17.4%)、①シバレル(2.3%)の順である。札幌では、③書カサラナイ(22.5%)、④笑ワサッタ(17.4%)、⑤オキレ(14.5%)、②手袋をハク(13.1%)、①シバレル(0.3%)の順で、一部に富良野と順位の違いがあるがその差はわずかである。こちらやはり、全体に札幌の方が富良野よりも、2、3割程度低めの数字にな

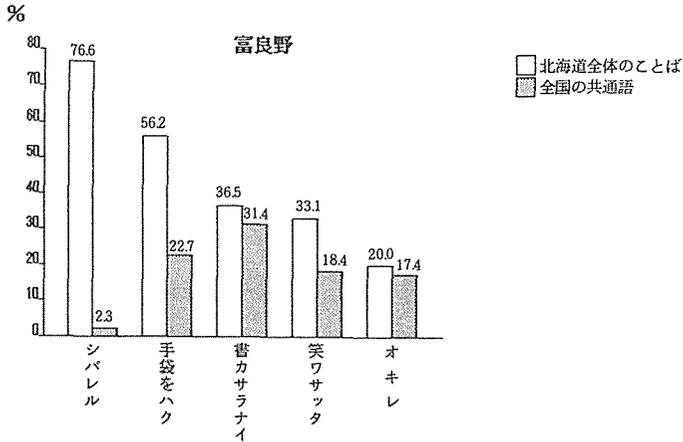


図18 「使う」と答えた人の使用地域意識(富良野)

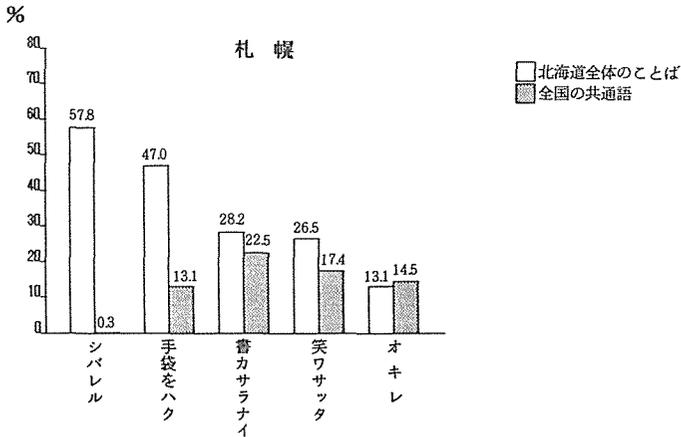


図19 「使う」と答えた人の使用地域意識(札幌)

っているが、項目間の比率は両地域とも非常によく似ている。

ここで注目すべきは、シバレルは一応別として、その他の非全国共通形が、一部の人に「全国の共通語」と意識されて使われていることである。一部の人といっても、富良野で全回答者の約2、3割、札幌で約1、2割を占めるから、決して少ないとは言えない勢力である。特に、書カサラナイ、オキレ、では、「北海道全体のことば」と意識して使っている人と肩を並べるほどである。このように、非全国共通形を「全国の共通語」のつもりで使っている人

の存在は、無意識のうちに両地域における全国共通語化を押し止める力とな^{注14)}ってはたらいっているだろうと思われる。

ことばの実際の通用範囲と、通用範囲に対して話者のいだいている意識とのずれの問題は、北海道の場合にやや深刻であるが、このような例は実は全国各地にみられるものである。実際には地域共通語にすぎない言語形式が、それより上位の共通語と錯覚されるケースは、都市化が進むにつれて今後しだいに減少していくと推測されるが、一方では、地域共通語にすぎないという認識が生まれることによって、新たに話者の使い分け意識の中に積極的に^{注15)}位置づけられる可能性も残されている。

5. おわりに

本稿では、北海道の富良野市・札幌市における社会言語学的調査の資料にもとづき、主として、話者の言語使用意識のあり方と実際の言語使用のかかりについて分析・報告した。

富良野・札幌とも、共通語使用に対する意識がきわめて強い地域である。この傾向は、一方では「北海道共通語」に対する強い志向性として表れているが、他方では自らのことばを「全国共通語」と同一視する方向へと導くことにもなった。実際は「地域共通語」にすぎない非全国共通形を、「全国共通語」のつもりで使っている話者が少なからず存在することが、このことを如実に物語っている。

富良野と札幌とを対比させた結果、話者本人の「全国共通語」使用意識と実際の言語使用との間のずれは、富良野よりも札幌の方が小さいことが指摘できた。これには、札幌の方が都市化の進行度が大きいことが、関与していると推定される。

今回の調査は、アンケートと面接の併用である。限られた時間の中で大量の情報を能率的に被調査者から引き出すには、このような調査法に頼らざるをえない面がある。しかし、実際の言語使用の調査（実態調査）ということ^{注16)}を厳密に考えるならば、まだ不十分である。多くの質問項目でえられた「使

う」という情報は、実は被調査者の内省の結果にすぎないからである。

国立国語研究所(1974)では、「道聞き」という場面を利用して、話者の内省による回答と実際の言語行動とのずれをチェックした。今回の調査でも、面接調査終了後に話者の共通語度に関する調査員判定を行って、話者の意識とのずれを後で分析できるようにしている。このような手法はもっと積極的に開発する必要があるだろう。

質問法に関しても問題がないわけではない。現在では「場面によることばの使い分け」は、無視することのできない言語生活の重要な一側面である。今回の調査のようにひたすら「普段くつろいだときのことば」を前提に、回答を求める方法では、とりこぼす部分も大きいと言わざるをえない。たとえば、陣内正敬(1988)に示された、スピーチスタイルによる言語変種の積極的な使い分けというような側面をしっかりと捉えるためにも、質問法には改良の余地が多々あると思われる。

以上、今後の課題の一端を述べて、本稿を閉じる。

注

- 1) ここで伝統的な方言区画論とは、東条操監修(1964)に代表されるような、日本語全体を視野に収めた、鳥瞰的な立場からの地域分割の議論のことをさす。最近の新しい方言区画論の研究動向については、井上史雄(1984)を参照。
- 2) 全国共通語は、単に「共通語」ということの方が多いが、ここでは、地域共通語、その他、一般にいわれる共通語(common language)との混乱を避けるために、全国共通語のまま用いる。なお、本稿では「標準語」を全国共通語と同じ意味に用いて実施したアンケート調査の結果も扱っている(第3章)。実際の調査では、被調査者が「(全国)共通語」と「標準語」とを同一視しているかどうかは、実は前もって何もわかっていない。調査結果の分析では、この点への配慮も必要である。また、この二つのことばに関する被調査者の区別意識それ自体も研究対象とすべきであろう。「(全国)共通語」と「標準語」の区別についての詳細は、柴田武(1977)、上村幸雄(1975)を参照。
- 3) この科学研究費補助金による一連の調査研究には、次の5種類がある。
 - ① 富良野市における同一話者に対する27年前との比較調査(1986年度)

- ② 富良野市における言語生活・共通語化調査（1986年度）
- ③ 札幌市における言語生活・共通語化調査（1987年度）
- ④ 札幌市への単身移入者に対する言語生活調査（1987年度）
- ⑤ 北海道各地の高校生に対する29年前との比較調査（1988年度）

この報告では、②、③の調査結果の一部を扱っている。筆者は、研究分担者として一連の調査研究の企画・実施に参加した。

次に、研究分担者名を掲げる（敬称略）。野元菊雄，杉戸清樹，米田正人，佐藤亮一，沢木幹栄，小林隆，相澤正夫，水野義道，池上二良，小野米一，菅泰雄，南芳公，吉見孝夫，南不二男，徳川宗賢，真田信治，高田誠，志部昭平，日向茂男，鈴木敏昭。

- 4) 富良野市を農村型地域社会の代表として位置づけたことについては、注釈が必要である。大都市札幌と対比させるだけが目的ならば、農村型地域社会の候補地は、他にもいろいろと考えられるであろう。しかし、ここでは、注3)で述べた一連の調査研究の中の、「①富良野市における同一話者に対する27年前との比較調査」（いわゆるパネル調査）との関連性を重視して、富良野市を選んだ。富良野市におけるこの27年間の共通語化の進展状況が捉えられると同時に、大都市札幌との比較を通して、都市化の程度差による共通語化の違いも捉えられる点で、二重に有利な条件が揃っていると判断したからである。農村型地域社会の一典型という意味での代表ではないことに注意されたい。但し、水野義道（1989）によれば、富良野／札幌の対比は、①人口密度は、低／高、②年齢別人口構成は、高年層（50代以上）多／若年層（20代、30代）多、③産業別人口構成は、第一次産業多／第三次産業多、④人口の推移は、変化少／増加大、のように、人口構成上の4点からみて、農村／都市という対比の傾向を十分に示しているという。
- 5) この項目をはじめ、以下の各項における調査結果の分析では、グラフの全体的傾向を指摘するために、ある種の推定を前提とした記述をすることがある。本来ならば、客観的な証拠にもとづいて議論すべきであろうが、現段階では分析がそこまで詳細に行われていないため、このようなレベルに留まっている。了承願いたい。
- 6) アンケート用紙作成上の手違いで、札幌では選択肢の配列順が、(4), (3), (2), (1), (5)と、富良野とは逆に「標準語と違う」という方に傾いた選択肢から順に並んでいる。こういうことも、場合によっては回答に微妙な影響を与えるかも知れないが、ここでは無視する。
- 7) 小野米一（1980）ではこの問題を扱い、海岸方言をも含めた道内各地での調査結果から、「全国共通語化のすすんだ地点では「東京」の比率が高くなり、おかれている地点では低くなっている。東京のことばと札幌のことばとの比較において、

- 標準語として「東京」をとるか「札幌」をとるかということが、その地点の全国共通語化のバロメーターともなりうるのである。」とまとめているが、ここでの結果もこれと一致する。
- 8) 出身地別の実数とパーセント(括弧内)を念のために示す。富良野は、地元171人(57.2)、周辺の町29人(9.7)、北海道76人(25.4)、東北地方11人(3.7)、その他12人(4.0)。札幌は、地元115人(32.8)、北海道190人(54.1)、東北地方10人(2.8)、その他36人(10.3)。
 - 9) 小野米一(1980)にも、ことばづかいについてそれほど切実なものがないと、いきおいことばづかいについての判断が甘くなる、という旨の指摘がある。
 - 10) 「なぞなぞ式」の質問文に対して最初に回答された語形は、被調査者にとってなじみの深い語形であろうと推定されるが、それだけでいま使っている使用語であると断定はできない。そのために、念押しの確認は必要である。
 - 11) 全国共通形「オキロ」と「オキレ」の二大勢力がほぼ拮抗しているが、富良野では、わずかにまだ「オキレ」の方が優勢である。選択肢以外の回答では、「オキナサイ」と「オキナ」が目につくが、これは男女差がはっきりしている。男/女の形で実数を示すと、「オキナサイ」は、富良野1/39、札幌1/53、「オキナ」は、富良野0/8、札幌0/7となっている。ここには、命令形を使うときの丁寧度に対する、男女の意識の差があらわれているとみられる。なお、選択肢式の質問法では、いくつかの競合形が同時に提示されるために、それらの間での選択意識が強くはたらく、個々の形式の回答率が、提示確認式による場合よりも低めに押えられる可能性がある。
 - 12) 「使用率」ということばを厳密に用いるとするならば、このような扱いはできないことになる。われわれ調査員は、ことばの実際の使用現場に立ち会っているわけではないからである。この立場からすると、ここでの調査結果は、すべて被調査者の言語使用についての意識(内省)を聞いてきたものといわなければならない。
 - 13) シバレル、手袋をハクが、根強い勢力をもつ言語形式であることについては、水野義道(1989)も参照。
 - 14) 「使う」と答えた人を100%として、各項目の「全国の共通語」とする率をみると、富良野/札幌の対比は、率の高い順に③書カサラナイ(38.4/37.4)、⑤オキレ(36.8/36.2)、④笑ワサッタ(28.2/31.1)、②手袋をハク(24.1/16.9)、①シバレル(2.5/0.4)となる。総体的に、順位、回答率とも富良野・札幌間でほとんど差がないことに気付く。ここからは、文法項目の方が語彙項目よりも「全国の共通語」のつもりで使われやすいこと、裏を返せば「方言」と意識されにくいことが、より鮮明に見て取れる。

- 15) 地域共通語にすぎない言語形式が、全国共通語と錯覚される全国各地の例については、佐藤亮一（1989）を参照。

参考文献（著者名の五十音順）

- 石垣福雄（1976）『日本語と北海道方言』北海道新聞社
- 井上史雄（1984）「新しい方言区画論・方言類似度」『新しい方言研究』（『国文学解釈と鑑賞』49-7）
- 上村幸雄（1975）「日本語の方言，共通語，標準語」『方言と標準語—日本語方言学概説—』筑摩書房
- 小野米一（1978）「移住と言語変容」『岩波講座日本語 別巻 日本語研究の周辺』岩波書店
- （1980）「北海道における標準語意識」『国語教育研究』（広島大学教育学部光葉会）26（上）
- （1984）「共通語化と方言の将来」『新しい方言研究』（『国文学解釈と鑑賞』49-7）
- （1989）「北海道方言の均一化」『人類科学』41（九学会，地域文化の均質化II）
- 国立国語研究所（1965）『共通語化の過程—北海道における親子三代のことば—』（国立国語研究所報告27）
- （1974）『地域社会の言語生活—鶴岡における20年前との比較—』（国立国語研究所報告52）
- 佐藤亮一（1989）「現代日本人の標準語感覚」『玉藻』（フェリス女学院大学）24
- 真田信治（1984）「社会言語学と方言」『新しい方言研究』（『国文学解釈と鑑賞』49-7）
- （1987）『標準語の成立事情』PHP研究所
- 柴田武（1959）「北海道のことばは標準語か」『北海道新聞』1959年2月29日付，（『柴田武にほんごエッセイ 2 地域のことば』（1987）大修館書店に再録）
- （1959）「北海道に生まれた共通語」『言語生活』90，（『社会言語学の課題』（1978）三省堂に再録）
- （1977）「標準語，共通語，方言」『標準語と方言』（「ことばシリーズ6」）文化庁
- 陣内正敬（1988）「言語変種とスピーチスタイル」『日本語学』7-3
- 東条操監修（1964）『日本の方言区画』（日本方言研究会編）東京堂出版
- 日高貢一郎（1980）「標準語と方言をめぐって」『NHK放送文化研究年報』25，（「日本人の言語意識」の第2章）

北海道方言研究会（1981）『北海道のことば 五十嵐三郎先生古稀祝賀記念論文集』
（北海道方言研究会叢書第3巻）

水野義道（1989）『『北海道における共通語化および言語生活の実態』調査から一語彙について—』『日本方言研究会第49回研究発表会発表原稿集』（1989年10月27日於・茨城大学，当日追加配布資料B4判4枚）

[付記]

本稿の第4章は，昭和62年度国立国語研究所研究発表会（昭和62年12月12日，於国立国語研究所，共通テーマ「地域語の変容とその研究法」）において，「非全国共通形の使用意識—北海道言語調査から—」と題して行った研究発表にもとづいている。当日，会場で貴重なご指摘をいただいた加藤正信氏に感謝申し上げます。

また，データ集計作業の一部に，荻野綱男氏作成のパッケージプログラムGLAPSを利用し，その恩恵を被った。

「北海道における共通語化および言語生活の実態」を課題名とする調査研究全体の報告書は，近く刊行の予定である。本稿で扱った資料も，また別の観点からさらに整理され分析をうけることになっている。その意味で，本稿は中間報告的な一試論であり，今後のデータ整備によって数値等に若干の変動がありうることをおことわりしておく。

最後にこの場を借りて，貴重な時間を割いて調査にご協力くださったかたがた，調査の遂行に際し数々の便宜をはかってくださった関係各位に対し，心からお礼申しあげる。